

フランス革命期の王族・貴族への眼差しの変化

——私生活と政治的批判——

鈴木 球子

キーワード： フランス革命 世論 ルイ 16 世 マリー＝アントワネット

はじめに

フランス革命勃発直後の 1790 年に、エドモンド・バークは『フランス革命についての省察』を出版する。革命に対して辛口の考察をするこの書物の中で、彼は貴族階級や聖職者たちへの攻撃について、次のように述べている。「この革命を擁護する連中は、自分たちの旧来の政府の悪徳の誇張だけでは満足せず(略)、彼らの国の貴族と聖職者の階級を恐怖の的として描き出すことで、今や祖国の名声そのものへの攻撃に及ぶ¹」。「貴族階級へのこの種の激烈な非難の声を、私は純然たる作りものだと断言する²」。

バークの指摘通り、当時の世論はかつてのアンシャン・レジームの権力者たちに対する憎悪の念を決して隠そうとはしなかったし、それが正しいことであるとも認識していた。河野健二はフランス革命を「民衆の革命」と呼び、「フランスにおける政治闘争があからさまな階級闘争として展開された³」と述べる。当時のフランスにおける世論がとりわけ槍玉に挙げたのが、マリー＝アントワネットであった。しかし、彼女や夫、その取巻きたちに対する批判は、初めから明確に政治的意図を持って表明されたものではなく、彼らの私生活の暴露や中傷を主としていた。特に性的な内容を含むものは、ゴシップとして世を賑わせた。だが、宮廷での私生活の乱れの暴露は、次第に道徳的非難の様相を帯びるようになり、体制の崩壊に拍車をかけていく。マリー＝アントワネットの私生活における性的な側面に対する攻撃は、革命政府が彼女を断罪する際にも大きな影響を及ぼしており、実の息子との関係を裁判で問いただされるほどであった。

ルイ 15 世の公妾ポンパドゥール夫人は、「我が亡き後は大洪水」といったとされている。本論文では、十八世紀前半から革命後にかけての幾つかの文章（文学作品や中傷パンフレット等）を読解・分析して、まさに「大洪水」のように体制が崩れていく中で、権力者たちに対する批判的文章の書き手たちの視線がどのように変化していったのかを明らかにしていく。

1. 権力と文章

王族や貴族など、権力を有する人々に対する中傷が行われたのは、決してフランス革命期だけのことではない。ロバート・ダーントンは『禁じられたベストセラー』において、ルネサンスにまで遡って、「大物 (les grands) として知られる名士たち⁴⁾」に対する中傷文、つまり名誉棄損的攻撃の例を示している。貴族同士の政治パフォーマンス的な口撃や、民衆の間での道化芝居を通じた批判や街頭演説など、その種類は様々であった。活版印刷術の発明以降は、印刷物の増加、特に新聞の誕生がこの状況をさらに促進させた。ダーントンはだが、次のようにも述べている。「十六世紀と十七世紀に『大物』についての下品な言葉をたくさん発掘できるにしても、本としてまとまった、十八世紀のベストセラー中傷文に比較できるものはなにもない⁵⁾」。

ところで、このような中傷文は規制されることはなかったのだろうか？ むろん、書物の検閲や閲覧・所持の禁止は、書物の歴史上、頻繁に行われてきた。写本の生産が修道院内で行われていた中世には、その監視の任を請け負っていたのは主にカトリック教会やパリ大学の神学部であった。活字本が出版されるようになると、より出回るようになった書物は発言力を強めていった。二宮素子は「フランス絶対王政下の書物と検閲⁶⁾」において、出版統制の権限が、教会から国王の手に移行する過程を解説している。それによれば、印刷術のフランス導入から革命へと至る300年あまりの統制の歴史は、1) 中世以来の教会の出版統制権が依然強かった時代、2) 王権が出版統制権を手中に収めていく時代、3) ルイ14世の死去以降の、出版統制の事実上の弛緩の時代、の三つの時期に分けることができるという。

この第二期の後半にあたるルイ14世の治世は、言論界への統制が強く行われた時期であった。フロンドの乱勃発時に、のちにマザリナードと呼ばれるようになる政治的パンフレット類の出版が増大したことをきっかけに、宰相マザランは印刷物の取り締まりに着手した。ルイ14世の親政が始まる前には、出版統制権は王の権力下に集中するようになっていた。取り締まりの対象となったものには、正統派カトリックに対する異端の書や反宗教的文書、誹謗文書 (libelle diffamatoire)、公安を乱すもの、良俗を乱すもの、などがある⁷⁾。

ルイ14世の死後から十八世紀後半にかけて、匿名で刊行される文書や地下文書の数は増大した。啓蒙思想の開花に伴い、反宗教的文書や政治哲学書が秘密裡に出版された。さらに、リベルタン文学と呼ばれる、放蕩 (libertinage) を描いた作品も、この時期に多く刊行されている。これらの書物の多くは、オランダやスイスなどの外国で刊行されフランス国内に流入した。「リベルタン (libertin)」とは、ラテン語の「liberti」や「libertinus」を語源とし、もともとは「解放奴隷とその子ども」を示し、解放・自由という二重の意味を持つ語であった。十七～十八世紀の辞書には「libertin」の様々な解釈が並び、この語に単一の意味を与えるのは困難であるが、それらの中でもとりわけ重要視されているのが、キリスト教に対する反発的態度と「快樂主義」に関わるものである。現代の辞典の多くは、リベルタンの語意を、「放蕩者」「無神論者」、そして十七世紀の思想の流れの中であらゆる宗教的教義に囚われない「自由思想家」を指

したと指摘する⁸。おそらく、キリスト教思想からの逸脱から、性的モラルも含めたキリスト教的道徳規範からの解放へと、意味が変化していったものと推測される。リベルタン文学の視点は多様であり、恋愛の自由を謳うもの、快楽を再評価するもの、クレビヨン・フィスの作品のように社交界の駆け引きを描いたもの、ダルジャンス侯爵の『女哲学者テレーズ』のように哲学的自由と身体的自由とを関連付けたもの等々が存在した。

ここで、権力者たちの性への注目の理由、つまり政治と性の結びつきを明らかにするために、十八世紀に匿名で著された作品を幾つか参照してみたい。1721年にアムステルダムで匿名刊行されたモンテスキューの『ペルシア人の手紙』は、パリを訪れたペルシア人のユズベクと友人リカが故郷を始めとする各地の友人や知人たちと交わした書簡の集成という形で、ルイ14世の晩年から摂政時代のフランス社会や政治制度、宗教政策や風俗等を風刺的に描き出した。リカはその手紙の中で「この王(=ルイ14世)は偉大な魔法使いです。その支配力で臣下たちの心まで左右するのです⁹」として、フランス国王の権力の絶対性を語る。ユズベクも「国王は、非常に巧みに人を服従させる叡智を持っていると言われております¹⁰」として、リカと同様の感想を示し、さらにその政治のやり方を「東洋的政治」に類比させている。

彼(=国王)は同様の叡智で、自分の家族、宮廷、国家を治めています。世界のあらゆる政府のうちで、彼はトルコのそれか我が尊きスルタンのそれを最も好んでおり、東洋式政治を評価していると、度々きいています¹¹。

ユズベクはまた、ペルシアのハレムに残してきた寵姫ロクサーヌに宛てて、フランス女性の慎みのなさを報告している。彼女たちは決定的に身を持ち崩すことは少ないにしても、「快楽への絶え間ない欲求に支配されている¹²」とし、それに対してロクサーヌが「この心和む隠れ家(=ハレム)¹³」において慎み深く暮らしていることを、彼は好ましく思っている。しかしユズベクの考えに反して、ハレムの秩序は乱れていき、物語はロクサーヌの恨みの手紙と服毒自殺によって幕を閉じる。ルイ14世やスルタンの専制性について語るユズベクは、自分もまたハレムにおいて専制的支配を行っていることを理解しておらず、ロクサーヌと恋をしていると独りよがり信じこんでいる。貞淑だと思われていたロクサーヌの不貞は、彼自身が疑問を持つことすらなかった権力構造への抵抗である。ミシェル・ドゥロンは「オリエントの題材は政治と性における絶対的支配の並行を可能にする¹⁴」と述べている。つまり、ハレムの構造と政治における専制的な支配構造とは並べて対比され、政治と性、あるいは宮廷と性のイメージは結びつくのである。

ディドロの『おしゃべりな宝石』は、彼の名を伏せて、1748年にアムステルダムで刊行された。物語は世界紀元1500兆320万1年のコンゴ王国のバンザを舞台とするという、途方もない設定で始まる。新国王マンゴギユルは、宮廷の上流婦人をはじめとして様々な階級の女性の性遍歴を告白させることのできる、魔法の宝石を手に入れる。彼はその指輪を使ってみた結果、多くの女性の不貞を知ることとなる。ロクサーヌと

は反対に、マンゴギユルの寵姫は彼に貞節であることが最後に判明する。宮廷の性風俗のこうした頹廢ぶりの描写は、小説の中心的な題材となっているが、その一方で、コンゴの社会事情や様々な制度を描くエピソードも、この作品には収められている。『おしゃべりな宝石』がルイ 15 世の時代の風紀乱れる社会状況を、皮肉をこめて風刺したものであり、コンゴ王国がフランスを、バンザがパリを、マンゴギユルがルイ 15 世、寵姫がポンパドゥール夫人を指していることは、当時の読者には明らかであった。『おしゃべりな宝石』は刊行後数カ月で 6 回も版を重ねるほどの人気を博し、ここでも宮廷と性、社会風刺の結びつきがいかに関心を惹きつけるものであったかを、うかがい知ることができる。

こうした社会風刺や批判的な香りを漂わせる文書や文学は、すでに革命的意図をもって書かれていたのだろうか？ 直接的にはそうではない。具体的に民衆に武力蜂起を求めたり、君主制の廃止を訴えたりする記述は、これらには見られなかった。同時代の『法の精神』(1748)を始めとする政治哲学書や思想書についても同様であり、フランス革命の思想的土台になったとは言えても、革命を説くものであったとは言えない。だが、宮廷の頹廢ぶりを公に示すことは、その権威の失墜に繋がるものではあった。

革命勃発が間近に迫った 1778 年に、ボーマルシェは有名な戯曲『フィガロの結婚』を書き上げた。これは、アルマヴィーヴァ伯爵に仕える家臣フィガロの結婚式を巡る様々な事件を通して、貴族の横暴さを痛烈に皮肉った戯曲として知られている¹⁵。つまり、快楽の追求は、出自のみを根拠とする権力の理不尽な行使と繋がる時に、非難されるのである。召使の許嫁に下心を抱き、結婚の許可を餌にして初夜の権利を奪い取ろうとする伯爵はまさに、ふしだらさと権力の濫用とを結びつける悪しき貴族の見本である。国王ルイ 16 世は、この作品に危機感を抱き、上演と出版を禁止した。だが、貴族の中には、いずれ自分たちに非難の矢が向けられるだろうことに、まだ気が付いていないものたちがいた¹⁶。宮廷から粛清されたことにより、『フィガロ』は却って人々の好奇心を煽った。王室付主席次女カンパン夫人の『回想録』は、この戯曲が貴族の社交サロンやカフェで朗読され、非常な評判を呼んで、作品上演の後押しをしたことを教えてくれる¹⁷。

2. マリー＝アントワネットへの批判—『シャルロとトワネットの恋』

アンシャン・レジームの終焉が近づくにつれ、大貴族や王族を描いたスキャンダラスな中編小説の流通は激化していく。頻繁に攻撃の対象になったのは、ルイ 15 世、その公妾のデュ・バリー夫人、ルイ 16 世、そしてマリー＝アントワネットである。特に外国人の王妃に対する攻撃は、非常に厳しいものであった。首飾り事件¹⁸や義弟アルトワ伯との噂など、彼女の敵はその品行の悪さをあげつらうための材料に事欠かなかったが、それらの中には、流言飛語の類も多分に含まれていた。彼らの私生活は、真実も嘘も十把一絡げに醜聞として大々的に喧伝され、彼らの社会的制裁へと繋がっていった。

ここでフランス革命前後の、マリー＝アントワネットに関する中傷文を見ていきたい。『シャルロとトワネットの恋』は1779年に刊行され、著者はボーマルシェとも言われているが、真偽は不明である¹⁹。この短いパンフレットは、シャルロつまり王弟アルトワ伯と王妃との不貞の恋を描いたものである。ルイ16世の性的不能は、当時、広く知られており、この文書においても、彼は妻を満足させることのできない情けない国王として描かれている。こうした弱々しい描かれ方は、ルイ14世の宮廷における恋愛を扱った、ビュシー・ラビュタンの『雅なフランス』と比較すると顕著である。様々な女性と浮名を流したルイ14世を表すために、この物語の中では「偉大なる王 (le grand roi)」という表現がところどころで使われていた。恋愛スキャンダルが王の名声を傷つけることにならなかった太陽王の時代と比べて、閨房事情が嘲笑の対象となる革命前夜の国王の権威の衰えは明らかである。

『シャルロとトワネットの恋』には目をひくことが二点存在する。一つ目は、文学的に表現されてはいるものの、王妃の身体の状態描写がしっかりとなされているという点だ。ここで思い出されるのが、サド侯爵の『ジュリエット物語または悪徳の栄え』に登場するナポリ王妃シャルロット（アントワネットの実の姉）の閨房場面との類似性である。ナポリ王妃の身体描写も『シャルロとトワネットの恋』に似通って、形態や器質に言及したものとなっていた。サドは「この素描は実物に基づいている²⁰」というもっともらしい注をつけているが、彼が実際に王妃の閨房に入ったという事実はまったくなく、これが巷のゴシップを参考にしたものか、あるいは想像の産物であることは確かであろう。

二つ目は「呼び鈴 (sonnette)」という小道具の使い方である。パンフレットは、シャルロとトワネットの愛の営みが、駆けつけてきた召使たちによって繰り返し邪魔される様子を、面白おかしく描いている。シャルロは怒り、王妃は嘆いて、二人は原因を探し出そうと試みる。

彼らの熱情を邪魔していたもの……それは呪われた呼び鈴のリボンだ
リボンの房が
昼間のこれらの出来事の
呪われ、悪意に満ちた原因だ
それは2つのクッションに挟まれていた……²¹

身体の動きが聴覚を通じて、他者に伝えられるという設定は、リベルタン文学の中にしばしば似通った表現を見出すことができる。例えば、ギュイラル・ド・セルヴィーネの『鈴、あるいはD***侯爵の回想録』(1749)を参照してみよう。侯爵は彼の周囲で行われる様々な情事を、それぞれの寝台に結びつけた「鈴 (sonnettes)」の音を通して楽しんでいる。

他から隔たったこの部屋は、侯爵のものでした。周囲に置かれた鈴には札が付けられ、寝室を使用している女性たちの名前が書かれていました。音ははっきりとし

ていて、夜の静寂の中で和音を奏でます。それらの変化や様々なぶつかり合いが大層心地よいカリヨンを作り出すため、愛の讃歌を聴いているかのようでした。音はそれを生み出す運動を鮮明に伝えており、最初は規則正しく、続いて性急になり、直後に一体化し、それからよりはっきりと聞こえ、速度を落として段階的に止まりました²²。

『シャルロとトワネットの恋』もまた、「呼び鈴の大きな音が、陶酔を漏らす²³」としており、呼び鈴の音が身体運動を暴露する様子を描いている。表現の類似性は明らかである。このパンフレットは情けない国王をからかい、また「王子や国王たちはすぐに性愛に走る²⁴」として、宮廷の性生活の乱れぶりを揶揄しているのだが、一方でそこにはまだ政治への言及は見られない。内容は性愛の描写に集中しており、呼び鈴の紐の失敗談は、怒りよりもむしろ笑いを誘うものである。意見書というよりは、『鈴』や『ジュリエット物語』のようなリベルタン文学との共通点のほうが、むしろ色濃く読者に印象づけられるのである。

関谷一彦は『シャルロとトワネットの恋』を、王妃の痴情を書いたもう一つのパンフレット『ルイ 16 世の妻であるマリー＝アントワネットの色情狂』（1791）と比較をし、前者が性愛行為の描写のみに留まっているのに対して、革命後に書かれた後者は不義の子の存在、つまり王太子の血筋の正統性にまで言及していることを指摘する²⁵。さらに言えば、前者は辛うじて「恋」の物語の枠内に留まっているが、後者は王妃と複数の相手との情事を示唆しており、話の主題は身分の高い者同士の恋愛（不義ではあるが）から、王妃の身持ちの悪さを強調するものへと変化している。革命を経て、中傷文の内容はより辛辣で、対象者の名誉を傷つけ、印象を損ねようとするものになり、さらに個人同士の恋愛を越えて、国家的な問題へと変質したのである。

二つのパンフレットの間、「恋と性愛の物語」から、「不義の結果たる子供の誕生と国家の問題」へという変化は、同時期にリベルタン文学に訪れた危機と呼応している。中世的なキリスト教禁欲主義が弱まった十八世紀に、寛容するにせよ、風刺の材料にするにせよ、快樂の追求について人々は積極的に語った。放蕩を好んで主題としたリベルタン文学が盛んになったのも、まさにこの時期であった。だが、ルソー的道德観、言い換えれば近代的道德観が成立していくにしたがって、快樂の追求に代わって国家のためのよき市民（citoyen）をなすことと、「放蕩の冒険譚」に代わって「父性と母性や家族の物語」とが語られるようになった。つまり、アンシャン・レジームの終わりは、放蕩について語る文学の終わりでもあったのだ。例えば、革命直前に書かれた『フィガロの結婚』は、権力を悪用する貴族の傲慢な欲望は厳しく否定しているが、「小さなリベルタン（petit libertin）」と呼ばれる小姓シェリュバンの思春期のときめきについては、微笑ましいものとして一貫して寛容な態度を取っていた。だが、同作者によって革命後に著された続編『罪ある母』（タイトルがすでに母親という役割に言及している）では、主題は、不義の結果生まれてきた子どもたちと、両親たちの罪の償い、そしてブルジョワ的な家族の物語に変わっている。

あるいは、1787 年から 1790 年にかけて出版された、ジャン＝バティスト・ルーヴ

エの騎士フォーブラを巡る一連の物語に目を向けてみよう²⁶。フォーブラについては「最後のリベルタン」としてしばしば語られてきた。出自にも富にも恵まれた若者フォーブラはパリの社交界で手ほどきをうけ、次第に放蕩児へと成長していく。彼はどんな誘惑をも撥ねつけることなく、女性たちと情事を重ねるが、その後半生は打って変わって苦難に満ちたものなる。革命後に書かれた第三作の中で、彼は疲労と病気に打ちのめされる。革命前の活力に満ち溢れたリベルタンぶりは、見る影もなくなっている。

こうしてリベルタンたちは、紙面から姿を消し、放蕩を「罪」と認識するブルジョワ的道德がその後を席卷した。シェリュバンやフォーブラのような若者像は寛容的には描かれなくなり、近代以後はわずかにその片鱗を、『ゴリオ爺さん』のラスティニャックや『感情教育』のフレデリックに留めるばかりとなる。こうした状況と並行して、王族や貴族に関する文書についても、『シャルロとトワネットの恋』に見られたようなリベルタン文学的要素は次第に影を潜め、代わって「国家」に対する政治的な責任の追及が問題となっていくのである。

3. 革命後、『フランスの国王たちの犯罪』、『フランスの王妃たちの犯罪』

ルイ 16 世とマリー＝アントワネットに関する言説の傾向は、革命以後、どのように変化したのだろうか？ ここでルイ＝シャルル・ド・ラヴィコンテリの『クローヴィスからルイ 16 世にいたる、フランスの国王たちの犯罪』(1791) とルイ・マリー・プリュドムの『君主制の始まりからマリー＝アントワネットにいたる、フランスの王妃たちの犯罪』(1792) を参照してみよう。

ラヴィコンテリが革命派であることは、彼の著書のタイトル(叙事詩『自由』(1789)、『人民と国王たち』(1790)、『国民議会における人民の諸権利』(1791) など)を見れば明らかである。『フランスの国王たちの犯罪』の成功は、彼を過激な方向へとさらに突き進ませ、引き続き著名人たちの犯罪を書き連ねた書物(『ペテロからピウス 6 世にいたる、法王たちの犯罪』、『ロタール 1 世からレオポルド 2 世にいたる、ドイツ皇帝たちの犯罪』など)を刊行させていくこととなる。

『フランスの国王たちの犯罪』において、ラヴィコンテリは、クローヴィス以来の歴代の君主たちの暴力を一つ一つ検討する。「ルイ 16 世が、国王であれば皆が襲われる呪いから逃れられるのか、それとも捕らえられるのかを検討してみよう²⁷」と彼は述べる。つまり、この本は国王という地位にある人物の犯罪性を、前提として執筆されているのである。この書物の中では、ルイ 16 世の私生活について、さらにいえば彼の閨房における弱さについては、ほとんど触れられていない。彼に関する記述は徹底して、政治的な批判となっている。宮廷の浪費については、はっきりと指摘され、それは国王ばかりではなく、マリー＝アントワネットとその取巻きを批判する内容にもなっている。「財政は、宮廷の浪費のせいで、かなり前から嘆かわしい状態にあった²⁸」。

ラヴィコンテリは、革命期の出来事をそれが起きた日付とともに辿っていく。彼は国王に「tu」と呼びかけ、親裁座の主張、オルレアン公ルイ＝フィリップ 2 世との対

立、人権宣言や聖職者基本法の拒否などについて、手厳しい意見を述べる。文章中で使われている語は、ところどころで大層扇動的である。「これは市民の王の行為なのか、それともこの上なく高圧的なスルタンの行為なのか²⁹！」と、彼は訴えかける。『ペルシア人の手紙』で見たように、東洋的な例を引くことには、専制君主の絶対的な支配ぶりを読者にイメージづける効果がある。「市民の王」と「スルタン」という対比は、王が后者であると匂わせ、その横暴さを際立たせるのに役立っている。

国王がもっとも非難されることとなった出来事の1つに、1792年のヴァレンヌ逃亡事件がある。これは国王一家がパリを脱出し、国境近くのヴァレンヌで逮捕された事件であり、国王が国を捨てようとしたという認識を民衆に抱かせ、その権威の大きな失墜に繋がった。ラヴィコンテリの筆もむろん、この件について容赦をしない。「ついにこの卑怯者で逃亡者の国王はパリへ連れ戻された³⁰。」「彼の返答は、厚かましくも偽造旅券を用いたものにふさわしくペテン (impostures) の連続であった (略)³¹。」こうして、使われる語は次第に過激になっていく。国王や王妃の取巻きを表す言葉として、「吸血鬼 (sang-sues)」「売国奴 (traîtres)」「悪党 (scélérats)」などが文章中に散見される。国王と宮廷人たちは、罵りの言葉でもって貶められ、その地位から引きずり降ろされるのである。

祖国を亡命し、外国であるオーストリアに援助を求めようとした国王の裏切り行為を告発するにあたって、ラヴィコンテリはカロリング朝の下ロートリンゲン公シャルル (ルイ4世の息子) とユグ・カペーとの対立、つまりカペー朝の成立時の事件を引き合いに出す。

もしフランス人たちが、彼にロートリンゲン公位を授けた皇帝 (=オットー2世) の好意を求めたがために、ルイ・ドゥトラメール (=ルイ4世) の息子のシャルルを王座から追い落としたのならば、外部の援助を求めたがために、フランス人たちが彼の失脚を宣言したのならば、(略) より当然のことながら、どれほどルイ16世は罪深いのだろうか³²?

八世紀近く前の事例を根拠にする論旨は、強引さを感じさせる。ラヴィコンテリは時系列に沿って国王の「犯罪」を明らかにしていくが、その書き方には強い恣意性、あるいは奇妙な必死さが漂っている。国王断罪の「正統性」が、あらん限りの例を提示して主張されているのである。ヴァレンヌ事件については、彼の別著書である『ペテロからピウス6世にいたる、法王たちの犯罪』でも触れられているが、その記述には虚偽が紛れ込んでいる。ラヴィコンテリは法王にも「偽善的な (hypocrite)」「残忍な (barbare)」といった形容詞を付して、そのイメージを最悪のものに貶めた上で、さらに国王の逃亡の成功を信じた法王がルイ16世を祝福したという、あり得ない内容まで付け加えている。

この偽善的で残忍な法王が、フランス国民全体の意志に反する者たちを受け入れたことは、有無を言わず、彼が国家の敵であることを証明している。(略) 彼は

ルイ 16 世の逃亡がうまくいくと信じて、彼を祝福した。彼は国王を暗黙のうちに、彼が流させた血の迸りによって、祝福したのだ³³。

反国王派であることと、革命への賛同をこうしてはっきりと示したラヴィコンテリは、1792 年 9 月に、国民公会の議員に選出された。そして、翌年のルイ 16 世の裁判において、その処刑に票を投じた。

次に、ジャーナリストであったルイ・マリー・プリュドムの『フランスの王妃たちの犯罪』に目を向けてみよう。この書物が描き出すマリー＝アントワネット像は、おおよそは、これまでの世論のとおり、贅沢好きで色情的な女性である。その容姿については、数々のパンフレットが告げてきたように美しく、上品であるとされ、決して美男子ではなかったルイ 16 世との不釣り合いな対比が描かれる。『シャルロとトワネットの恋』のような、あるいはリベルタン文学が行ったような器質的描写はもはやなされない。とはいえ、彼女の本性は「軽率」とも「放埒」とも訳すことのできる「*légéreté*」という言葉で表されている。例えば、戴冠式のためにランスを訪れた際に、彼女は「彼女の行動の軽率さ (*légéreté*) についてルイ 16 世が行った勧告にも関わらず」、作者不詳の劇を上演させたのだが、それは「バッカスの巫女たちの乱痴気騒ぎに似ていなくもなかった³⁴」とされる。さらに彼女は「贅沢に並外れた愛を抱いていた」が、「ルイ 16 世は彼女の出費を減らすようとも言い張ったのだった³⁵」。国王は妻に比べると、寛容できる感覚の持ち主であると捉えられている。

我々は、どれほど王妃たちが墮落していて、卑しい好みを有していたかを教えてくれる一覧表を辿ってきた。だが、マリー＝アントワネットがこれらの仲間たちをしのぎ、フランスの宮廷を、それまで全面的には広がっていなかった放蕩で汚染したというのは、果たして本当だろうか³⁶？

彼女の放蕩とその結果としては、『シャルロとトワネットの恋』や『ルイ 16 世の妻であるマリー＝アントワネットの色情狂』と同様に、アルトワ伯を始めとする相手たちとの不義の恋や、王太子が嫡出児ではない可能性について、ここでも取り上げられている。ただ、プリュドムはアントワネットの恋愛について、「私はそれが通常の逸脱でしかないのに気付いた³⁷」と述べる。確かに王妃のふしだらさを指摘する記述は多いのだが、それが彼女を責めるもっとも重い理由とはなっていない。さらに、興味深いのが、プリュドムは王太子の血筋について、さほど重要視してはいないことである。「アントワネットが体面を重んじるか、汚辱の中を転げまわるかということは、国全体にとってどうでもよくはないか？ 彼女の子供たちの出自が嫡出かそうでないかは、かまわないのではないのだろうか³⁸？」と彼は考える。大事なものは、王太子の生まれた偶然がどのようなものであれ、彼を「一市民 (*un citoyen*)」に育てあげることである。

プリュドムが追求するアントワネットの罪はむしろ、政治的なものであり、ここでもヴァンセンヌ事件について語られている。「しかし、アントワネットにはより重く、

恐ろしく、許しがたい罪が課せられる。我々は彼女が、フランスを犠牲にするために、兄であるヨーゼフ 2 世と結んだ密約によって非難するのである³⁹。

だが、プリュドムは王妃の罪を数え上げながらも、世論の声を鵜呑みにすることに対して、わずかにためらいを見せる。「彼女は、負わされた多くの烙印の、憎悪や軽蔑に値するのだろうか⁴⁰？」と作者は尋ねる。「彼女に負わせたものについて、いかなる証拠も得られてはおらず、憶測に頼っているだけなのだ⁴¹」。さらに以下の記述は、世論の裁きに対する彼の疑問と迷いをはっきりと示している。

今日、世論の裁きのみ委ねられ、判決を下されたアントワネットは、己の良心において、すべての国民が思っているよりも罪はなかったのか、あるいはもっと罪深かったのかを唯一知ることができるのだ⁴²。

『フランスの王妃たちの犯罪』の最後のパラグラフは、次の文章で始まっている。

アントワネットよ！汝のみが汝を裁けるのだ。汝のみが、国民にどの程度憎む権利があるのかを、自身に言うことができるのだ⁴³。

このような姿勢が、ラヴィコンテリとプリュドムとの決定的な違いである。前者は国王の有罪性を前提とし、それを「証明する (prouver)」ための事例をかき集め、過激な言葉を使って世論を誘導する。一方、後者は、アントワネットをはじめとする王妃たちが無実だとは考えてはいないものの、世論に基づいて断罪することに、確証を抱いているわけではない。こうした躊躇いを反映するかのよう、プリュドムは後に『フランス革命の間に侵された過ちと間違い、罪の、全般的かつ公正な歴史』(1797)と『有徳なルイ 16 世の私のおよび政治的生活史』(1814)を出版し、革命に対して慎重な姿勢を示した。

おわりに

キリスト教的禁欲主義が弱まった十八世紀に、快樂の追求は様々な分野で花開いた。例えば、快樂の肯定と人間身体への注目は、哲学においては唯物論を発展させた。あるいは、宮廷生活においては、摂政オルレアン公フィリップもルイ 15 世も、自分たちの放埒さをまったく隠そうとはしなかったし、彼らに範を求めた貴族たちも数多くいた。宮廷の風紀は、急激に自由化した。同じ頃、匿名で刊行される文書や地下文書の数は増大し、そのうちには種々様々な放蕩を描いたリベルタン文学も多く含まれていた。これらの発現は互いに関連しあっている。

フランス革命は、それまで不当に権力を握っていた階級に対する闘争であり、自由と平等とを実現した革命であったとしばしば言われる。だが、国王や王妃、貴族たちに対する批判的な視線は、当初から革命的意図を明確に帯びていたわけではなかった。

真実と虚偽の両方を取り交ぜた、彼らの私生活のスクランダラスな暴露は、リベルタン文学的な要素を多分に持ち、当時の人々を喜ばせると同時に、支配階級に属する者たちの権威を引き下げるものでもあった。

だが、新たな近代道徳が成立すると、快楽の追求は大々的には賞賛されなくなり、リベルタン文学も次第に廃れていった。近代道徳はブルジョワ的な家族構造を基盤としており、性衝動ではなく、その結果たる子供を国家のよき市民へと育てることが語られるようになっていった。そして性的な放埒さは、旧体制の不道徳性の証として、アンシャン・レジームの名士たち、その中でもとりわけ王妃を政治的に攻撃する際の根拠として用いられるものとなったのである。

¹ Edmund Burke, *Réflexions sur la Révolution de France* (1790), A. Égron Imprimeur de S. A. R. Monseigneur, Duc d'Angoulême, 1823, p.245.

² *Ibid.*, p.253.

³ 河野健二, 『革命と近代ヨーロッパ』, 岩波書店, 1996, p.8.

⁴ Robert Darnton, *The Forbidden Best-Sellers of Pre-revolutionary France* (1996), Fontana Presse, 1997, p.198. ロバート・ダーントン著, 近藤朱蔵訳, 『禁じられたベストセラー』, 新曜社, 2005, p.273.

⁵ *Ibid.* 同書, pp.273~274.

⁶ 二宮素子, 「フランス絶対王政下の書物と検閲」, 『一橋大学社会科学古典資料センター Study Series』, No.2, 1982, pp.1~25.

⁷ 「こうして、当面する十七世紀後半の時期には、1649年の規制令および1665年の諮問会議裁定によって、反宗教文書、反国家文書、誹謗中傷、風俗紊乱の書、という四つのカテゴリーが明確となった」。同論文, p.13.

⁸ 拙著『サドのエクリチュールと哲学、そして身体』, 水声社, 2016, p.43.

⁹ Montesquieu, *Lettres persanes* (1721), Texte établi par André Lefèvre, A. Lemerre, 1873, p.52.

¹⁰ *Ibid.*, p.78

¹¹ *Ibid.*

¹² *Ibid.*, p.58.

¹³ *Ibid.*

¹⁴ Michel Delon, *Le savoir-vivre libertin*, Hachette, 2002, p.39.

¹⁵ 第5幕3場のフィガロの独白は、貴族階級への批判として、とりわけ有名である。「貴方は豪勢な殿様ということから、ご自分では大した才があると思ってらっしゃる。貴族、財産、家柄、地位、それやこれやで高慢ちきな！ だが、それほどのおいしいものを手に入れるのに、貴方はそもそも何をなさいましたか？ 生まれるだけの手間をかけた、ただそれだけじゃありませんか」。Beaumarche Pierre Augustin Caron de, *La folle journée ou le mariage de Figaro* (1784), *Œuvres complètes*, 1876, p.77.

¹⁶ レチフ・ラ・ブルトヌの『パリの夜』の第334夜のエピソードは、『フィガロの結婚』の初演の様子を描いている。大入りなので切符を持っていても入れないため、主人公とその友人は知り合いの侯爵夫人の棧敷に潜り込ませてもらう。

¹⁷ Campan Jeanne-Louise Henriette, *Mémoire sur la vie de Marie Antoinette*, Tome 1/13, Baudouin frères, 1823, p.276.

¹⁸ ジャンヌ・ド・ラモット伯爵夫人が、マリー＝アントワネットに渡すと偽って、枢機卿ロアンにダイヤモンドの首飾りを買わせ、騙し取った事件(1785年)。マリー＝アントワネットはこの件をパリ高等法院に持ち込み、ラモット夫人は有罪となった。この事件は事実と反して、マリー＝アントワネットの陰謀によるものとして噂になり、王妃の評判を落とすことになった。

¹⁹ このテキストを分析するにあたって、関谷一彦による翻訳を参照した。参照、関谷一彦, 「政治的中傷パンフレット」, 『リベルタン文学とフランス革命ーリベルタン文学はフランス革命に影響を与えたか?』, 関西学院大学出版会, 2019年, pp.94~105.

²⁰ Sade, *Histoire de Juliette*, *Œuvres III*, Gallimard, Bib. de Pléiade, p.1030.

- ²¹ *Les Amours de Charlot et Toinette* (1779), à la Bastille, 1789, p.7. Source gallica.bnf.fr / Bibliothèque nationale de France.
- ²² Jean Baptiste Guiard de Servigné, *Les sonnettes ou mémoires de monsieur le marquis D**** (1749), A Utrecht, 1776, pp.145~147.
- ²³ *Les Amours de Charlot et Toinette*, op. cit., p.7.
- ²⁴ *Ibid.*, p.4.
- ²⁵ 関谷一彦, 「政治的中傷パンフレット」, 『リベルタン文学とフランス革命ーリベルタン文学はフランス革命に影響を与えたか?』, p.120.
- ²⁶ ジャン＝バティスト・ルーヴェは、1787年に『騎士フォーブラの一年間の生活 (*Une année de la vie du chevalier de Faublas*)』、1788年に続編『騎士フォーブラの六週間の生活 (*Six semaines de la vie du chevalier de Faublas*)』を、そして1790年には『騎士フォーブラの恋愛生活の結末 (*La Fin des amours du chevalier de Faublas*)』を著した。
- ²⁷ Louis-Charles de Lavicomterie de Saint-Samson, *Les crimes des rois de France, depuis Clovis jusqu'à Louis XVI* (Au bureau des révolution de Paris en 1792), Hachette Livre, BnF, Gallica, p.458.
- ²⁸ *Ibid.*
- ²⁹ *Ibid.*, p.459.
- ³⁰ *Ibid.*, 474
- ³¹ *Ibid.*
- ³² *Ibid.*, p.475.
- ³³ Louis-Charles de Lavicomterie de Saint-Samson, *Les crimes des papes, depuis St. Pierre jusqu'à Pie VI..*(1792), Lemoine Librairie, 1830, p.603.
- ³⁴ Louis-Marie Prumhomme, *Les crimes des reines de France, depuis le commencement de ma monarchie jusqu'à Marie-Antoinette*, 1792, p.325.
- ³⁵ *Ibid.*, p.326.
- ³⁶ *Ibid.*, p.327.
- ³⁷ *Ibid.*, p.329.
- ³⁸ *Ibid.*, p.330.
- ³⁹ *Ibid.*
- ⁴⁰ *Ibid.*, p.325.
- ⁴¹ *Ibid.*
- ⁴² *Ibid.*
- ⁴³ *Ibid.*, p.342.

参考文献

1. Michel Delon, *Le savoir-vivre libertin*, Hachette, 2002.
2. Michel Delon, *Le principe de délicatesse*, Albin Michel, 2011.
3. Robert Darnton, *The Forbidden Best-Sellers of Pre-revolutionary France* (1996), Fontana Presse, 1997.
4. ロバート・ダーントン著, 近藤朱蔵訳, 『禁じられたベストセラー』, 新曜社, 2005.
5. 関谷一彦, 『リベルタン文学とフランス革命ーリベルタン文学はフランス革命に影響を与えたのか?』, 関西学院大出版会, 2019年.
6. 二宮素子, 「フランス絶対王政下の書物と検閲」, 『一橋大学社会科学古典資料センター Study Series』, 1987, pp.1~25.
7. 河野健二, 『革命と近代ヨーロッパ』, 岩波書店, 1996.

2021年2月4日受理 2021年2月18日採録決定